

【資料紹介】

翻刻・藤山一雄『東邊紀行』(一)

佐 藤 睦 子

「梅光学院大学図書館所蔵和漢古書」(以下「和漢古書」と記す)所収の藤山一雄著『東邊紀行』(以下、『東邊紀行』と記す)の翻刻を行い、確認作業を経て、このたび本誌へ資料紹介として掲載する機会が得られました。

今回紹介する『東邊紀行』は、梅光学院初代学院長・広津藤吉氏と第五代目学院長・広津信二郎氏が古書収集された「広津文庫」の中の一冊で、昭和三九年十月に、梅光女学院大学附属図書館(現・梅光学院大学図書館)にて受入登録され、現在「和漢古書」として収蔵されている。

なお、この「和漢古書」は久保田啓一氏(広島大学教授)、蔵本朋依氏と松浦恵子氏(同大学大学院博士課程後期課程・当時)によって整理されており、その資料目録は「梅光学院大学図書館所蔵和漢古書図書目録稿」として作成、平成十六年・十七年に梅光学院大学文学会発行『日本文学研究』三九号・四〇号の二号に分けて掲載されているので、あわせて参照されたい。

これまでの経緯

筆者が『東邊紀行』の所在有無を確認した後、調査・翻刻の対象

としたのは、本学博物館の前身である梅光女学院大学附属資料館の時代で一九九八年に遡る。企画展の開催準備のため、「下関梅光女学院」時代の旧教諭である藤山一雄氏の関連資料の収集を行なった際、中島敦子氏(図書館司書・当時)の文献検索により、同書の存在が明らかになるきっかけとなりました。以後、岡本隆子氏(図書館司書長・当時)による研究的配慮と、ご協力をいただき、また、一方では財津永次氏(博物館学課程主任教授・当時)の御指導とご教授のもとで、翻刻作業が具体的に開始されました。

二〇〇一年には、藤山一雄に関する先行研究者で、大塚康博氏(名古屋博物館学芸員・当時)のご仲介にて、藤山家所蔵資料の調査に着手いたしました。それに伴わないこの『東邊紀行』に関する聞き取りおよび関連調査も開始、藤山家の御協力が得られ、現在に至っている。

本書の形態について

書名の『東邊紀行』は原則として外題に拠り、分類番号四五は「和漢古書」にしたがった。書誌事項は以下のとおり。

書名 『東邊紀行』

巻冊は一巻一冊、自筆稿本 昭和十三年成

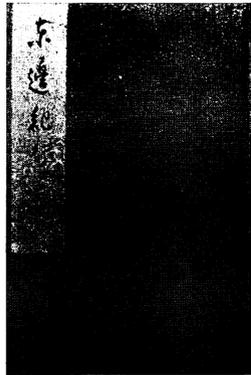
丁数 五〇丁（表紙・裏表紙別）

法量 縦二三・八センチ 横一六・一センチ

袋綴装 絹糸綴四穴 紙製造 文祥堂製

片面 八〇十二行 一行四字〜二十二字詰

写真一葉貼付 自筆稿本



『東邊紀行』について

『東邊紀行』は、旧満洲国の元号・康德五（昭和十三・一九三八）年十月十三日から同月二十七日までの十五日間の出来事を記した紀行文で、満洲国首都の新京（現・長春市）を出発して、吉林・図們・牡丹江・林口・佳木斯・哈爾濱へとたどる行程内容である。

著者の藤山一雄は、執筆当時である一九三八年頃は、満洲国国務院恩賞局長を経て、同年八月に、満洲国協和会（一九三三年設立）参与に就任している。

旅の目的は、冒頭部の「協和会工作の使命を帯びて東滿移民地視察の旅に出ず」と記されたように、移民地政策の実態を視察することにあつたらしい。実際に、移民団として最初に入植した村・弥栄村を訪ね、福島区第二班に所属する、農家の齋藤長五郎氏宅で生活の現実に触れている。藤山は家の間取りや農業作物の種類、家族構成、食事内容等も、詳細に書き取っている。特に自然条件に即した家づくりの大切さを示唆し、例えば、暮らしの中から生じる熱エネルギーを効率的かつ経済的な視野で活用、または排出するなど、住まい方と、暮らす人々の意識の問題などを取りあげている。また、移民団の子供達の教育方法における諸問題を含めて、移民地政策のあり方に疑問を呈す箇所もみられる。

同書には藤山の生活信条ともいふべき内容が随所に見られ、例えば、地理的な自然条件を踏まえた人間の文化的生活の実現を模索する考え方、思想のアウトライン的なものが浮かび上がってくる。また、藤山の多岐にわたる関心事をも読むことができる。

内容的には藤山がユーモアたっぷりに記した出来事を随筆風にまとめたものや、訪れた風景と心象風景とを読み込んだ短歌、景色や訪問先の人物等を淡水墨で描いた挿絵二十二図、ホテルのステッカー一枚、写真一葉を含んだ冊子になっている。

なお、この『東邊紀行』の解説およびその具体的な検証については、次号に全体をとおして、試みる予定である。

著者・藤山一雄について

藤山一雄（一八八九—一九七五）は、玖珂郡神代村（現・岩国市由宇町）の出身。生来の病弱回復のため、大阪の文楽師匠・豊沢雷

助のもとに六年間預けられ、義太夫と太棹を習得する。そこで生涯の生活信条となる真言密教の「三密の業」(意密・身密・口密)も学ぶ。その後、岩国中学校、第五高等学校、東京帝国大学法科大学経済学科を卒業後、アメリカの思想家ヘンリー・D・ソローに傾倒する。ソローの実生活を記した『森の生活・ウォールデン』を、藤山は下関市長門一宮で六年にわたって試む。

農業を基盤に信仰、絵画、音楽、建築設計、文筆活動を続けながらの清貧生活を実践。この時期に広津藤吉氏(下関梅光女学院学院長)と出会い、梅光女学院での地理科教諭時代(一九二一〜一九二六)が始まる。退職後も二人の親交関係は生涯にわたって続く。

一九二六年渡満。満州国國務院恩賞局長を経て、一九三九年満洲国国立中央博物館副館長に就任。「博物館エクステンション」と称する画期的な教育普及活動を推進、野外博物館「民俗博物館」創設に着手、斬新な博物館構想をもとに運営されるが、一九四五年終戦。引揚げ後は神代村で帰農。周東養鶏農業協同組合を創立、会長就任。農山村文化研究会を創立、会長就任。山口県知事顧問就任。山口県農山漁村新生運動の推進者として活動。

一九七五年八十五歳で永眠。

凡例

この翻刻は以下の基準にしたがい、作成した。

- 一、自筆稿本『東邊紀行』の形式にしたがって、改行すべきところ、紙面の都合により、現行のように文字詰めを行なった。

- 一、旧字体、仮名遣い、促音便、地名、誤字・脱字は原文のままとした。

- 一、文中のルビは原文のままにしたがって付した。

- 一、不快・差別用語とみなされる不適当な表記も、歴史的資料に準ずる性質上から、原文のままとした。

- 一、句点(。)、読点(、)は原文のままとした。

- 一、文中にある短歌には意図的に文章と異なる字体を施した。

付記

今回の翻刻掲載にあたっては、同書の翻刻を一からご指導をたまたわりました財津永次氏(元本学教授)をはじめ、藤山研究全般にわたり、極めて有益なご助言をくださった犬塚康博氏、藤山浩一郎氏、とりわけて藤山多美子氏には、資料調査の並々ならぬご尽力とご協力を賜り、このたびは藤山一雄氏直筆の翻字確認および、内容のお目通しをいただきました。また本書受入年月日に関する事項の確認については永見昌代氏(図書館司書長)にご協力をいただきました。この場をお借りして衷心より深く感謝を申しあげます。

(さとう むつこ)

東邊紀行 藤山一雄

(二才)

東滿雜詠

康徳五年十月十三日吾協和会工作の使命を帯びて東滿移民地視察の旅に出ず。随員をとのことなりしもひとり旅の気軽さに漂然として京図線の汽車にのる。

山らしき山も見えざる平原に楡紅葉せる興隆山の村

シンロンシヤン

後簷に楡柳紅葉し前庭に豕の子遊べる秋深き村

(三才)

吉林天主堂 十月十三日(二ページの挿絵あり)

(三ウ・四才)

卡倫の驛の小庭にあかあかと雁成紅の映える寂しさ

楡の森の蔭に村あり村ありと見れば墓場あり生死の輪廻

飲馬河の左岸の匳える連崗を超えて見え初めぬ遠き山脈(龍家堡にて)

なにの木紅葉なるらん一連の丘を蔽ひて西日に映えあり(下九臺にて)

(四ウ)

土們嶺の採石場に秋日さし石も人等も銀に光れり

遠く見えし山なみすでに逼り来て汽車は紅葉のトンネルをゆく

河湾子の驛に珍らし月見草月待たずして薄化粧せり

豚追いてむげにかこたず青年を送れるならん彼等羨まし(哈達湾の山間にて)

(五才)

松華江高瀬船 十三日(二ページの挿絵あり)

(五ウ・六才)



松華江畔旗人の住宅 十三日(二ページの挿絵あり)

(六ウ・七オ)

夜名古屋ホテルに泊る吉林到着と全時に公署の車にて江畔をドライブす、バレドの夕景えもいはれず、殊に天主堂のほとりの旗人達の古きツングース風の住宅は漢人の文化を加え面白き景観を呈せり ホテルの隣室に大毎の和氣律次郎氏あり 一處に夕食し文楽を語りて興つきず、聞けば桐竹門造翁と交友深き由なり。余は両三日前「酒屋」のお園の人形を全翁より貰ふ約束をなせるだけに奇遇を感じり、宿の部屋の (七ウ)

窓より東洋醫院の八角堂非常に面白く見える。満鉄安聖宮のホスピタルなり。

吉林病院(一ページの挿絵あり)

(八オ)

翌朝、凶門に向け出発す。全列車に多数の警官あり、中に「閣下」と呼ばれる男あり、驛毎に降りて、少年隊の検閲をなせるための雑当いはん方なし。全一行に新京警察署長をなせし質石君も見ゆ。

山近き盆地の端に収穫を終えし村あり土堡にまかれ

灌木の山坡を削り耕せる畑に残る青き白菜

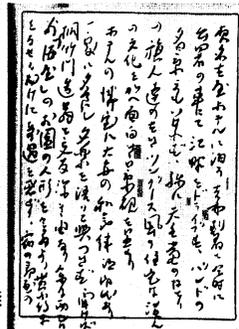
秋深き馬尾山マビシヤンの村の家々に珠子繫ぎして吊せる唐辛子

(八ウ)

天崗テンガンの奥にそびゆる岩山に逆光を浴び垂れし白雲

一面のすゝき尾花は秋日浴び白ピロードの如く光れる

一兩年前、余は四月残雪老節嶺を越えしことあり、当時の記憶よりすれば沼道の開発全く隔世の感あり、主として朝鮮人の努力の結果なり。



老節嶺の深き溪間にすゝき光り岩に激してをどれる早瀬

(九オ)

馬尾山の村 (壺翁の印・二ページの挿絵あり)

(十ウ・十一オ)

老節嶺の深き溪間もなんのその朝鮮人の残す足跡

山頂のトンネルゆはずれば視野遠く不毛の空地天につゞけり

柱立て屋根を葺きかたはらピーズ(坏子) 乾しかく家を建つ此の植民地(坏子とは泥を日乾せる煉瓦様のものなり) 秋日さす草山に白樺 柏紅葉せり。「玉堂」を想ふ、玉堂は河合玉堂の藝術のことなり

(十一ウ)

いづちゆく老頭兎ならん村里中遠き茅野をひとり辿れる

岡も谷も残骸のごと地に伏せる巨木の群よ心痛める

沼道の谷といひ岡といひ悉く焼き倒されし巨木の残骸

激戦の直後を思ふ倒木の此の痛ましき山河の景色

(老節嶺一帯の伐木は匪賊防禦の為に沼道の森林を伐採せる由なるものまゝにせるハ惜しき心地す)

(十二オ)

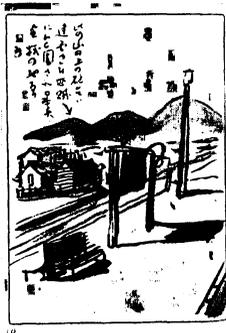
敦化の驛 十月十四日

(十二ウ)

此の山の上の砲台ハ建国の年匪賊に包囲され日本兵全滅の地なり(二ページ挿絵あり)

(十三オ)

敦化を過ぎて吾コンパートにありしに、展望車より前頁のスケッチをなせるを、三四の警官、傍より見てありしが、帰室するや否や、その「閣下」来室し「貴下は藤山氏か」といふより「左様」といふに「余は三浦なり 岩国の産なり。中学も岩国なり」といふ、



「ああそうでございますけや、ちゅうにかあに」と岩国弁丸出なり、国鐵警護総監三浦閣下はそちのけにして「ををちや、なにけや、絵もお描きなんけや」とひげ面していふ、「今夜は図門で一杯のもう」との提案なるも「余は閣下と全宿 (十三ウ)

は真平なり。外の宿で独りぐっすりねる」といふと「まあそねえにおいいな」と簡任一等はしきりに誘惑 遂に図門までの三時間は題なしになり 歌もつくれず絵もかけず。佐人と全席の迷惑さを痛感す。図門着。三浦氏は「カメ屋ホテル」余は「萬洲」に泊る、国防婦人会等他 澤山のクレイ首の出迎あり 三浦氏は豪勢に暗夜に没し行けり。(十四オ)

十月十五日 石岷パルプ工場附近の景観 (二ページ挿絵あり) (十四ウ・十五オ)

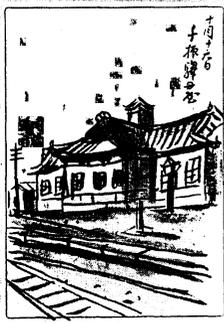
図們より弥栄に

十月十五日〜十六日

薪もやす白き煙の立ち登る山の陰なる大荒溝の町
 嘎呀河と無樹の山々の輪廻しらず水禍に悩みぬける図佳線
 山といふ山に一樹の影もなし此の省政村に緑化を説かん
 彭利出で、稲田はてなくほのぼのと曙の空につゞける目出度さ (十五ウ)

十月十六日 千振驛母屋 (二ページ挿絵あり) (十六オ)

曠原に二輛の貨車と機関車の重なれる死骸ゆくりなく見ぬ
 いづ、よりいづ、に向ふ大車ならん遠き地平をうちつゞき行く
 朝まだき西の地平にひともの忠魂碑見ゆ雲をかぶりて



図們より弥栄に
 十月十五日
 新山は白煙の立ち登る山の陰なる大荒溝の町
 嘎呀河と無樹の山々の輪廻しらず水禍に悩みぬける図佳線
 山といふ山に一樹の影もなし此の省政村に緑化を説かん
 彭利出で、稲田はてなくほのぼのと曙の空につゞける目出度さ



思ひそめず西方の原に一樣の市街現る千振村ならん
人ごとにあらじ佳地によきのみ水、ありやなど思ふ千振を望み

(十六ウ)

十月十六日 弥栄村(一ページ挿絵あり)

(十七オ)

国們を午後二時出発の列車は大荒溝あたりにて暮れたり、大荒溝は国們江の支流にのぞみ、沿岸の森林滅亡の爲め、常に洪水に遇ふ爲め「大荒溝」の町名を得しならん。日暮
て早々ベツトに入る 牡丹江林口を夢にし千振に近く夜明けたり 六時着が二時間後れ
て八時半、弥栄村永寶鎮につく、霜あり、わざと本部にゆかず鎮をぬけて、東岡に登り
三年前の日を追想す 赤間三郎なる青年と立話して村長を訪ひ一處に小学校にゆく

(十七ウ)

南面せる丘の麓にあり 泥柳の防風林ニかこまれし、美しき煉瓦造の高荘なる小学なり。
教員宿舍、生徒寄宿舎共に新築の煉瓦造りにして 温突ニより採煖す、丁度日曜日にし
て寄宿舎生ハ凡て附近農家に帰り唯一人の子供炕床にねそべりて 自習しつゝあり、自
家よりは親の愛をのけて遙かにコンホタブルならん、校長と火鉢を股倉にして十一時頃
まで移民子弟の教育につきて語る、教育は凡て大使館教務部の支配をうけ日本文部省の
都市的功利

(十八オ)

主義的乃至英雄崇拜主義的にして何等滿洲的、農民的ならず、四五年すれば此等の子
弟は都市を慕い、世間的立身ニあこがれ茲ニも亦所謂「教育費」の科目の爲めニ悩を生
ぜん、協和會の工作の必要を痛感す、樺川縣長等來訪せる爲め辞して南郊に出ず、校長
來宿を功に希望せり、余が何んなるやを領んとせしも一旅人なりと辞りて出ず。一キロ
を歩みて福島区第二班の農民、斎藤長五郎氏宅を漂然として訪ふ。

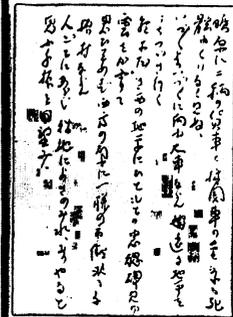
(十八ウ)



17



18



齋藤長五郎家は二夫婦、子女四名、老母 支那人常傭夫四名、馬七頭、豚二疋、鶏五十羽により構成さる 耕地面積六町歩、未耕地四町歩、林野約五町歩を有す福島区二十四戸(内三名土匪戦により戦死)の一戸なり。主として蕎麦、大豆、燕麦、包米(トーマロコシ)米を主作す、家を中心にして東西一〇〇―南北一、〇〇〇メートルの農場制を採れるユンカーといひてよろしき土豪なり 然れどもその生活には殆んど文化なく来訪せし時二八主婦や小供等をキャベツの整理をなしつつありき。(十九才)

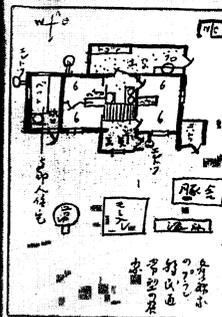
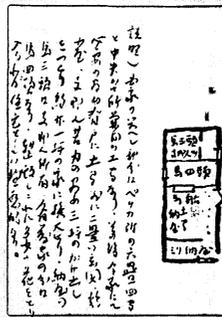
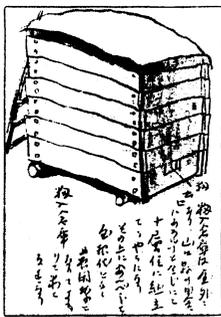
十月十三日 裏より見る齋藤長五郎氏宅。(二ページ挿絵あり) (十九ウ・二十才)

齊藤家のプラン。移民通常型の農家(挿絵あり) (二十ウ)

(説明) 国家の與へし部分はペチカ附の六畳四間と中央台所兼用の土間なり、その後全家にて必要の為め背戸に土間別に二畳の玄関・鶏小屋、支那人苦力の為め三坪のかけ出しをつくり約廿一坪の家に拡大せり、納屋の馬三頭は支那人所有、齊藤家の分は馬四頭なり、整頓しこれに多少の文化をとり入るれば住宅としてハ理想的なり。(挿絵・配置図) (二十一才)

建築費は坪約五十円餘なりしといふ。藁葺、壁は坯子(乾煉瓦) ペチカ附、ペチカは煉瓦にてストーブ様に中を空虚とせる つい立てにしてその中に 熱気を入れ、煉瓦をあつくするなり 上図の如く室内の中央にあり たき口は壁の外にありて茲より火をたきその煙は別図の如く外に排出するなり シベリア風といふべきか。支那人は温突にして炊事用の火を利用せるハ経済的なり (ペチカ図あり) (二十二ウ)

粗入倉庫は屋外ニあり、山口県の田舎にあるものと全じにて十層位に組立てるやうになり その上にあんぺらを屋根代となし農用李ニなりてするりて米となすなり



(初入倉庫の挿絵あり)

(二十三オ)

斎藤秋世さんと春子さん キャベツの整理をなせる図 (二ページ挿絵あり)

(二十三ウ・二十四オ)

十六日の夜斎藤家に泊る、カボチャの塩煮及びジャガイモは殊ニをいしく飽食せり北海道産を種にせるもの由なり。夕方記念撮影をなしたり。次ぎの日出発の時子供等に一円宿御礼として辞るのもきかず参円置く、

(二十四オ)

移民地に支那人山東苦力の小作人を多数ニ使用することは甚だ問題なり。その消費、生活を見るに、日本人遥かに不経済的にして且つその効果半分なり。小作は一年百五十円位なるもその生活文化遥かに高く、十年廿年後を想像する時は関東洲三十年の移民の失敗を採り返す事になりはせぬかと心配なり。日本人に既に地主根生のものあり。主人は都会に出て小作が入ってやる家もある由なり、弥栄は質実、千振は既に企業化し、

(二十四ウ)

商業的になり居れり。共に特長あるも一長一短なり、

斎藤家の三毛猫 十六日夜 (1ページ挿絵あり)

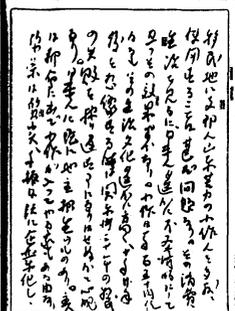
(二十五オ)

十六日 (一ページ挿絵あり)

(二十五ウ)

弥栄村に二三の支那飯店あり、お客は日本人も勿論多し、豚饅頭は中々うまく且つ新鮮にして余もその一飯店の客となれり、此の支那料理店は馬鹿にならぬ吸収機関なり二三年の間にその門戸の張り方余りに躍進的なるに驚けり、やがて永宝鎮の大街に立派なる支那料理屋、日本のカフェも出来ることならん、然して日本人の都会集中、移民の退却が見えるやうの心地す。

(二十六オ)



弥栄は温しいへば三寒の次の日にいうわあさまだき丘
 福島の移民の家にあた、かきかぼちやよばれぬ立ち話しつ、
 やぬち尚暖かなればとひたに願ふこの人ら未だ文化を知らず
 生くこと易しいへじ此の人等を銃をはなさずなりはひてあり
 大豆畠のはるかの地平縫へるごと千振の郷の賑やかに見ゆ

(二十六ウ)

千振は今年秩父宮御視察遊ばされ駅より村えの道路実^に立派なり 高原をドライ
 ブするうちにはるかなる丘陵の斜面に千振村本郷の見ゆる景観は大陸ならで八見
 られぬ絶景なり
 忠霊塔立てる丘辺に土堡結び、いささかの移民煙立てあり
 水を引き稲栽ゆることに能もてるこれの韓人^{からひと}の驚く技術
 薄れ日の空に連る湿原に白衣の人等初を磨りあり

(二十七オ)

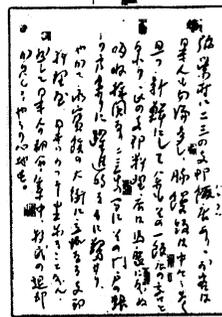
たが攝れる野菜なるらん南際の丘の斜面にもえぎして生ふ
 ものものしと見る遙かの丘を壓し日本兵營の並び立ちたる
 仙嶺内虎山に汽車はひたすべ美しくひろき不毛の斜面
 褐色の夢のさなかをすべると汽車はひたゆく未耕の斜面
 此の原に火をはなちなばいかばかり心ゆく限り燃えひろがらん。

(二十七ウ)

何時の日に此の大原を人文は踏み汚すならん恐ろしき不毛地、(圭山附近にて)

勃利は新興の都市、日本の軍事要地にして汽車より見るも雄大なる都市計画想像
 さる驛のプラットホームに日本の妓達美しきものをきてのめりあるきつゝあり、
 茲より完達山脈の主峰の溪を縫いて林口に達する数十里の高原展望は驚くの外な
 し、遠く満洲に珍らしく大森林に蔽はるゝ山に見ゆ 紅葉を少し過ぎ落漠たるも
 樹木ある故尚賑やかなり

(二十八オ)



林口菊屋ホテルに泊す。給仕女熊本のものにして食事巾色々熊本の話きく。此夜ペチカ餘に熱し、部屋が乾燥し過ぎて少し 咽喉を痛めたり。青山端にて(二ページ挿絵)

(二十八ウ・二十九オ)

誰の手も力も籍らじ初を背負ひ本島人は生命のばしゆく

柔らかに四温を浴びて仮醒せる土堡の下の白山羊の群

大漠和、小漠和山の妹とせに抱かれて育つ永安移民地

十八日 圭山の村

(垂翁の朱印・二ページ挿絵)

(二十九ウ・三十オ)

東満鉄道沿線の警備日本兵營 十八日(二ページ挿絵)

(三十ウ・三十一オ)

林口を朝八時出発、揚木の日本移民少年訓練所を見る、少年移民は十五以上廿才位なるもその訓練余りに兵營的にして十五六才の時代を身心共に備りし兵隊の如き硬教育は甚だ問題なりと思ふ 出ても入っても命令的の生活なり、少しは甘へるべきおぼさんの必要はなきや、菓子を少しも食べさせぬことなども子供の心情なり 生理状態を知らぬものやり方なり、移民の教育といふよりも苦力の如く近ひ使ふ傾あり。寒心すべきことなり 密山までの道中ムーリン河の対岸の丘陵は第四、五六次の移民散住す、 (三十一ウ)

此の一带は大炭田の所在地にして溪清の如きハ大都會を現出す、達珠山より密山までハ全く日本兵營連続六十キロに渉る混成三ヶ師団を有すとの内所話なり、道中満洲国の警尉と密山県の電信技師全乗し此の附近の移民の模様をきく 密山に三時半着荃州ホテルに泊す、此の夜半、三浦総監一行来高投宿の由なり。密山県城上は一帶の湿原を越えて約三里余り東南の丘陵上にあり、興凱湖は南方二十キロにあり。夕刻まで附近を視察す。

(三十二オ) 次号へつづく

